

序

八木 光則

1 本書のねらい

2023年11月、青森・秋田・岩手県の三県合同シンポジウム「北東北の平安時代墓制」をテーマに発表とシンポジウムが盛岡市で開催された。このシンポでは、8世紀後葉以降の墓制がはじめて総括的にとりあげられ、新しく出現する方形周溝や墳墓など多様な埋葬方法が明らかにされた。

一方で、当シンポで直接とりあげられなかった重要なテーマに、7世紀～8世紀の北東北・北海道のみに分布する「末期古墳」の問題がある。近年、新たな知見が蓄積されつつある末期古墳の研究成果には、北東北だけでなく関東も視野に入れた研究をはじめ、類例が増えている北海道の末期古墳(北海道式古墳)の総括的な研究やガラス玉・鉄製品の副葬品を対象とした研究などがある。

本書は、こうした最新の研究成果をふまえて、「墓の被葬者像」「多様化する墓と葬り」「副葬品に探る交流」のテーマを切り口にして、北東北・北海道における古代の墓制と社会の実態を明らかにすることをめざしたものであり、各分野の到達点を示した論文を収録している。

2 墳墓の諸形態

北東北・北海道では、6世紀～10世紀に異なる墳墓がいくつか登場する。各論の理解の助けになるよう基礎的な整理をしておきたい。特に「末期古墳」は、東北の考古学や古代史ではよく使われているものの、全国的には必ずしも一般的でないと思われるので、基本的なところを説明することとしたい。

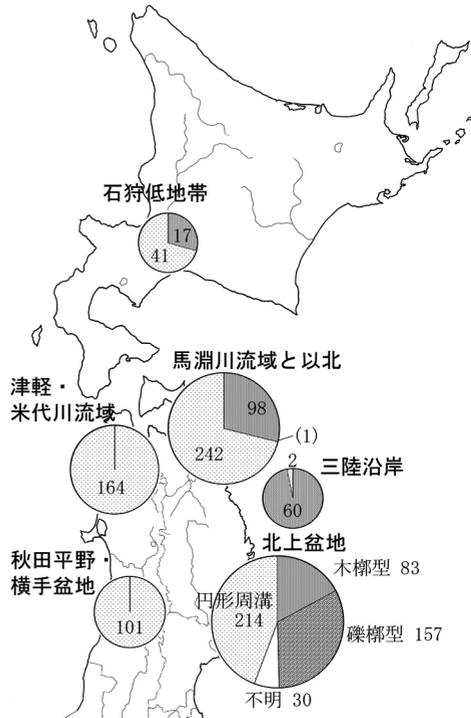
土壙墓 4世紀～6世紀、北海道では古墳時代の時期区分を採用せずに続縄文時代後半期とされ、北東北では古墳時代併行期に区分されている。両地域とも

角塚古墳などを除けば古墳が築かれず、遺体を直接埋葬する縄文時代以来の土壙墓が継続して造られていた。

6世紀後葉以降、北海道では土壙墓が継続し、北東北では末期古墳が登場する。7世紀には北海道でも末期古墳が造られ始め、墓域は異なるが土壙墓と併存するようになる。北東北の末期古墳群の中にも土壙墓はわずかながら認められ、末期古墳が造られなくなる10世紀以降に再び増加に転じている。土壙墓は古代の北東北・北海道において、連綿と受け継がれていた墳墓形態といえよう。末期古墳 考古学の分野では、古墳時代の終末段階を「終末期古墳」と定義しているが、「末期古墳」と大きく異なる点は、以下のように整理できる。一つは、古墳時代からの継続的な古墳の築造がなかった地域に新たに登場したこと、もう一つは古代の国郡制施行域外に居住する人びと(蝦夷)が墳墓の造営主体者・被葬者とみなされることである。

成立時期は末期古墳・終末期古墳ともに6世紀末～7世紀初頭とほぼ同じながら、終末期古墳は8世紀初頭に終わるのに対して、末期古墳は地域によっては10世紀代まで降るところに大きな違いがある。また末期古墳の規模に大きな差はなく、社会の階層分化が進んでいないことを指摘する説もある(藤沢2015, pp.210-212)。いわば末期古墳は、古代の北東北・北海道に居住する人びと(蝦夷)を埋葬した古墳様の墳墓なのであり、終末期古墳とは別物であるとされている。

両者は学術用語として命名された段階に、それぞれ異なる地



第1図 末期古墳の確認数(数字は古墳数。円形周溝には8世紀後葉以降相当を含む)